連載89 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（66歳・内科）

夜間せん妄の激しいパニック状態に苦慮し、高齢者医療の真髄を知る。

それは、平成8年ころ、まだ多少なりともバブル時代の名残があったころでした。夜9時ころといえば、自宅で家族団らんの時間帯です。先輩からのカラオケスナックへの誘いも無かったので街へも向かわず、久しぶりに自宅の居間で静かにテレビをみていました。すると、妻から心配顔で「あなた、どこか体でも悪いのと違う？」と問いかけられました。ですが、私は心静かに思いを巡らせながら、瞑想もどきにふけっていたのです。

しかし、その静寂の時間も束の間のことでした。突然、内線が鳴り響き、当直の看護師から至急連絡が入ったのです。当院入院患者のM.Kさん（82歳、男性、認知症・高血圧症・変形性脊髄症・膝関節症）が暴れだし、強い力でドアを叩き、手に負えないといった内容でした。いわゆる、夜間せん妄状態です。認知症患者さんの幻覚症状で、異常なほど力が出るのです。そして、本人はその時のことを全く覚えていないのが通常です。急いで、鎮静剤を注射しましたが、速効性に乏しく、転倒骨折予防などのため、しばらく行動抑制と見守りを要しました。

2時間ほど過ぎたころ、M.Kさんはやっと落ち着きを取り戻しました。逆に、目がぱちりと冴え、頭がクリアになりすぎた私は、知らずのうちに街のネオンを求めて徘徊していたのです。私自身、あらためて人間の習性の恐ろしさを実感しました。

翌日、精神科専門病院へご高診していただいたところ、M.Kさんは精神科への入院対象ではないとのことで、薬物療法などについてご教示いただきました。

その後、薬剤調整をしながら、高齢者医療の現場で夜間せん妄の患者さんに次々と出会うことで、私はいつのまにか、認知症「夜間せん妄」治療のスペシャリストになっていたのでした。最近では、認知症対応病棟や施設が充実してきましたが、在宅医療において、私にはその時の経験が今でも貴重であり、懐かしい思い出となっています。

今日も某施設の若いスタッフから電話が入ります。「先生、患者さんがこれは毒だと言って、拮抗薬（キッコウヤク）（リスパダール）を飲んでくれません」

「患者さんの好きな食品、例えばアイスクリームなどに混ぜてみて。がんばってね。患者さんが女性だったら、若いイケメンの男性スタッフに対応させるのもいいかもね」と、私は答えます。

介護の現場も、老若男女の世界です。
そして患者さんは、認知症・腰痛・膝関節痛に狭心症・悪性疾患などの重篤な合併症があり、多くの場合、医療との連携を必要とします。
「苦しさ」「暗さ」が漂いがちな生活空間ではありますが、それは患者さんと介護・看護・医療スタッフとの交流といった交差点でもあるのです。ですから、お互い知恵を出し合いながら、「楽しさ」「明るさ」がいっぱいの充実した人生の交差点にしたいものです。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 21名
（常勤6名、非常勤15名）
内科・外科専門医 18名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設!

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する 臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
「地方創生健康長寿研究会」平成27年4月1日発足

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/